

纏向 溝ぐるり



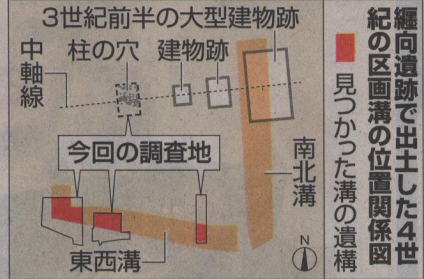
折れ曲がった4世紀中ごろの溝の跡
(2本の白線の内側) = 1月31日午前、奈良県桜井市辻、伊藤進之介撮影

4世紀の遺構見つかる

女王卑弥呼が治めた邪馬台国の候補地の一つとされる奈良県桜井市の纏向遺跡で、2009年に確認された3世紀前半(弥生時代末く古墳時代初め)の大型建物跡の近くから、何かを囲むような4世紀中ごろ(古

墳時代前期)の溝の跡が見つかった。同市纏向学研究センターが1日発表した。古墳時代に入っても重要な施設が造られる「特別な土地」だったとみられる。溝の遺構は3カ所で確認。東西方向に長く延び、

The Asahi Shimbun



纏向遺跡で出土した4世紀の区画溝の位置関係図
見つけた溝の遺構

西端は北に向けL字形に曲がっていた。全体で長さ約57㍎、幅5・8㍎以上と推定され、4世紀中ごろ、後半に埋没したとみられる。中から何かの祭祀に使われたいらしい、長さ約32㍎の刀形の木製品も出土した。

1は、二つの溝に囲まれた中に首長の居館があった可能性があるとみる。白石太一郎・大阪府立近つ飛鳥博物館長(考古学)は「4世紀の纏向には、初期ヤマト王権の重要な施設が点在した可能性もある」と話す。

今回の調査では、これまで大型建物跡と同じ東西の軸線上に3棟が並ぶとみられていた建物跡のうち、西端の1棟付近も調査。直径10×6㍎の柱穴約100個が確認されたが、想定されていたような建物跡は確認できなかったとして、従来を発表を修正した。同センター(0744・45・0590)は3日午前10時〜午後3時、JR巻向駅西側の調査現場で現地説明会を開く。(塚本和人)